

「陶印」について

周 東 清 芳

中国の古代の「印」は今日でも、文字学の資料や芸術作品として立派に生き続けている。古代から現代までの「印」の中に生き続ける生命を感じとりつつ、自分の目と手でこれを製作することは、単に自分の人生を「生きる」だけでなく、書道史や文字史という文化の流れの中に「生きる」ことにもなる。また、篆刻（印の製作）は古くから『方寸の中に宇宙を宿す』といわれているように、小さな面に小さな文字を刻ることによって、ひとつの宇宙（世界）を創造するのであるから、その世界に自分の生命が「生き続ける」ことになるだろう。

篆刻の概要については講座のパンフレットに略述し、参考文献も紹介しておいたので、このまとめでは省略して問題点と感想のみ、パンフレットの製作工程にしたがって挙げていく。

1 校字・印稿段階

参考にするべき字書を十分に用意できず、各人の校字終了時間に差ができた。爾後の作業がバラバラ

になったため、指示が徹底しなくなった。おそらく篆刻のための字書だとは思いますが、現代の書家や篆刻家の書いたものは線質・字形ともに格調の低いものが多い。普段から篆書・篆刻に接していない受講者はよいイメージがつかれない。また講師が一人では、短時間に全員の印稿の修正指導ができない。事前に印稿までは仕上げておくべきだったか。

印材が余ったために、多い場合は四個も刻った受講者がいたが、指導は一個に限って印稿段階から充実させるべきだったか。印影を見ればわかるように、印稿や布字が未完成のまま刻り始めたものが見うけられる。

2 印材製作段階

まず材料の粘土（陶土）だが、業者の持っていた「瀬戸」を使った。後で調べたら、「笠間」のほうが粒子が細かくそろっていてよさそうだった。

次は「練り」。納入してもらった業者から、袋に詰め、積み重ね、輸送しているうちに空気が抜けるだろうから特に練る必要はないと言われたが、その通りにしたら、残念なことに一つだけ焼成段階で割れてしまった。面倒でも菊練りなどして十分に練るべきだった。

陶印の特長を考えれば、「練り」から個人ですべきだろうが、せめて印材の形成は個人にやってもらうべきだった。自分の好みの形や大きさの印材ができれば、刻る意欲も違っていただろうし、なにより印稿の輪郭に合ったものができていけば、乾燥させたあとで輪郭を削るときの失敗が防げただろう。印面（刻る面）を平らにしておくのも形成の最後に一個ずつ確認しておくべきだった。「布字」のとき

の乾燥させた状態で刻る面を平らにしようとすると、粗い粒子のために余計傷がついてしまう。粘土の質にも左右されたし、素焼きをしない方法をとったこともこの段階以降の作業を難しくした。

3 布字段階

簡単にするには、軟らかい芯の鉛筆で入れればよいが、画の始筆・終筆部分の形が刻りながらでは整えにくいので、毛筆できちんと書いておいたほうがよい。しかし篆書の線を毛筆で、しかも逆に書くのは難しかった。鏡を使い慎重に書いても、慣れないことだから思ったように線が書けず、何度もやり直すことになった。少しでも受講者各人のイメージに近いものをもったので、これは仕方なかったか。

4 奏刀（刻字）段階

この段階で、乾燥だけか素焼きしたかの差が大きく出る。乾燥しただけの印材は、脆くて欠けやすいために刻り方が難しいが、古色を帯びた線が出る。素焼きをした印材は刻りやすいが、線質は質の粗い石印材とあまり変わらない。また、硬いと余分な力が入り、怪我をする危険性もあるので、今回は乾燥させただけの印材を選択した。が、力の加減や運刀、刀の種類などの条件により、味のある線を出せずに大事な線が何箇所も欠けて、読めない印になってしまうものがあった。

教室の照明が暗く、細かい部分が見にくかったと思う。直射日光では明るすぎるが、普通の教室の照明は、篆刻向きではない。座席の位置を考えるべきだった。

刻る道具は両刃・平刃の篆刻刀がよかっただろう。カッターは刃が薄く弾力があるので、篆刻には

向かなかった。一本千円前後で買えるし、この学習を基にしてこれから先も篆刻を続けてもらいたかったのだから、篆刻刀に統一すべきだったかもしれない。

「瀬戸」の土を使ったためか粒子の大きさにむらがあり、大きい粒子に刀が当たると、経験のない者はそのままの力で刀を運んでしまうので大きく欠いてしまう。どんな印材でも運刀の細心の注意が必要なのだが、慣れていないと指先の微妙な感覚がつかめないのである。

5 焼成段階

本学にも七宝焼きのできる簡単な電気窯はあるが、使用できる者がいない。そこで粘土を納入してくれた業者に頼んで専門家に「焼き」を依頼してもらったが、釉薬が刻面にかかってしまったものが二個あった。自分で釉薬をかけても失敗はあるだろうが、他に頼んでこうなったのが悔やまれる。

以上、今回の講座二時間（実質延べ五時間半）を通しての問題点を挙げてみたが、充分な準備をしておけば回避できたことが大半であり、大変申し訳なく思う。印材にしても、刻ることを考えれば軟らかく緻密な石印材の方がよかつたろうが、陶印はこういう機会がなければなかなか作ることはできないので、多くの問題は予想できたが、敢えて陶印にした。

石印材は上田市内（書道用品店・ハンコ屋など）でも入手できるので、是非石印に挑戦して篆刻を続けたい。そのときは、本講座でできなかった模刻（書という臨書と同様に古人の名作などを真似て刻ること）から始め、基礎・基本を体得すべきである。石印材ならば微細な線も真直ぐきれいな線も刻れるし、焼く必要もない。数多く刻ればそれだけ感覚が養われ、技術も身につくはずである。書の作品で線質が肝

要なのと同じく、篆刻でも刻線の質が大事であるから、刀の運びを徹底的に練習すべきである。

パンフレットに載せそびれた参考文献を一冊紹介するが、これは陶印のことにかなり詳しい——「篆刻と刻字の技法」(小木太法、理工学社、一六七八円)

終わりにこのまとめのメインディッシュ、本講座の受講生の作品を紹介する。デザイン、線質に素晴らしいものがあり、隠れていた才能の一端がうかがえ、殊に線質については、石印ではなかなか出せない味のあるものが見うけられる。(約六十パーセントに縮小)



岸山



岸山



子紀



子紀



子紀



勝



佐



美



兔



以



以



以



嵐



平大
JRØJKM



平大



平大



平大



場馬



常



久



花



砂万泉



封



永



武



国



かもと



佳



子秀



里乃美



子秀



美



美



美



子素出井



出井



出井



旦元



政



志



染



子洋



洋



正



俊



昭



兩



光



舟祥



志与



矢



秀



和



昭



玉



玉



玉



和



封



吉大



味三



玉



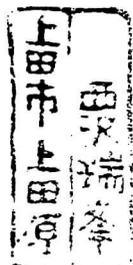
和



申壬



申壬



峯瑞沢西
原田上市田上